

研究・調査報告書

報告書番号	担当
353	滋賀医科大学社会医学講座公衆衛生学
題名 (原題/訳)	
Alcohol consumption as a risk factor for pneumonia : a systematic review and meta-analysis 肺炎の危険因子としての飲酒についての研究 : システマティックレビューとメタ分析	
執筆者	
Samokhvalov AV, Irving HM, Rehm J.	
掲載誌 (番号又は発行年月日)	
Epidemiol Infect. 2010;138:1789-95.	
キーワード	
飲酒、アルコール依存、因果関係、多量飲酒、肺炎	
要旨	
目的 : 研究の目的は、飲酒と肺炎の発症率の関係を定量的に評価すること、および考え得る機序を調査することである。	
方法 : システマティックレビューおよびメタ分析を用いて、飲酒またはアルコール中毒と市中肺炎の発症率の量反応関係を評価した。	
結果 : 飲酒量が増加するに従って直線的に市中肺炎の相対リスクは上昇した。1日あたり純アルコール飲酒量が 24g、60g、および 120g の者は、非飲酒者と比較して、市中肺炎発症の相対リスクがそれぞれ 1.12 (95%信頼区間 CI 1.02-1.23)、1.33 (95%CI 1.06-1.67)、および 1.76 (95%CI 1.13-2.77)であった。臨床的に診断されたアルコール中毒者は、市中肺炎のリスクが 8 倍高かった (相対リスク 8.22、95%CI 4.85-13.95)。機序については、臨床的または実験的な研究から、飲酒が呼吸器および免疫系統に悪影響を与えることが示唆されており、特に多量飲酒者は肺炎に罹患しやすいと言われている。また、口腔咽頭反射の低下や気管支肺胞の洗浄能低下など機械的な防御反応低下も多量飲酒者に報告されている。更に多量飲酒者はしばしば肝機能障害、栄養失調を来し、結果的に個人として不衛生状態となり、また免疫低下をもたらすことも報告されている。	
結論 : アルコールは統計学的に明らかな関係をもって肺炎の危険因子であり、直線的な量・反応関係が認められた。	